

北海道本道ではまだ記録がなく又標本も見ないが何れ何處かで発見される機会があらう。本州でも従来未知のものであつたが高山帯に比較的稀れに産し、信州の八ヶ岳で高橋幹夫氏が採集し、羽後の月山では私が採集した。

ちなみに KÜKENTHAL 氏が *Carex gifuensis* として発表した樺太産の標本は實はクロヒナスゲではなく此のヌイオスゲである。又同氏は *Carex Vanheurckii* MUELL. ARG. をヒメスゲに似たものとして居るが私は此の *C. amblyolepis* TRAUTV. et MEY. と考へる。

11) ヌマアゼスゲ (*Carex cinerascens* KÜKENTH.)

Carex cinerascens KÜKENTH. は故 U. FAURIE 氏が西暦1897に仙臺市、鹿島臺で採集して以來、誰れも之れを採集した人がなかつたが、昨年五月に下野國、下都賀郡、赤麻沼で關本平八、伏木兩氏が採集したので同地にも産する事が明かに成つた。従來和名が付けてなかつたのでヌマアゼスゲと新稱する。

C. P. Thunberg 氏の日本植物採集

北 村 四 郎

安永五年(1775)八月十五日、日本植物研究の志をいだき和蘭醫官として海路はるばる長崎に到着せる植物分類學者チュンベリーは歳三十三であつた。

當時鎖國政策を行へる我が國にて材料の蒐集を必要としたチュンベリーは非常の苦心を盡した。この材料こそ我が國最初の植物誌を生み日本植物分類學の基石となつてゐる。

異國人に對し頗る警戒せる當局者は一般に和蘭人が其の居留地なる出島より自由に外出するのを固く禁じてゐたのでチュンベリーは長崎附近の地に植



チュンベリー氏

THUNBERG 氏は Sweden, Götland, Jönköping にて1743年11月11日に生る。Upsala に近き Tunaberg にて1822年8月8日に死す。LINNEAUS に Upsala 大學で教はりこゝを卒業す。

June, 1932.

191

物採集するのを望んだが容易には許されなかつた。色々と努力せる結果前例のあつたのを理由として翌年二月七日より外出が許可された。

かくて八月十五日長崎到着以來翌年二月七日までは長崎の近郊には出られなかつたがその間全然日本植物が手に入らなかつたのではない。醫學をチュンベリーに親しく學んだ門人は師の爲め草木の種子を集めたのである。

この頃出島には廩舎があつて牛、豚、山羊、羊、などの家畜が歐洲人十四人と其の従僕の食料として養はれてゐた。夏季になると従僕は長崎附近の丘の青草を刈つて畜類を飼ひ、冬季には米、藁、樹の若枝などを與へるのであつた。チュンベリーは日に三度づゝ運ばれるこれ等の植物を注意してゐた。即ち彼の言葉を借れば「これ等の中からなかなか稀らしい物を得た」のである。

蘭船は長崎沖に碇泊して貿易の貨物を積込むがこの年は八月より十一月まで止つてゐた。チュンベリーは前任者と交代するまで船中に寝てゐたのである。船がバタビヤに出帆する數日前に居留地出島に寝るのを許された。この間船の附近の島々に上陸して植物を観察する事が出来た、然しながら比較的自由なのは無人島だけで人の住む島は長く止ると見張りの船から注意され去らねばならなかつた。即ち「余は船上に止つてゐねばならぬ時間を利用し附近の島々や高鉾島(*Papenberg*)に採集した。この年の秋異國の草木、灌木などの澤山の種子を集めバタビヤに歸るべきこの船に託し、かくてバタビヤより歐洲に送れり」。

高鉾島(*Papenberg*)は長崎港外にある、附近の小瀬戸(*Kosido*)と共に屢々チュンベリーが原産地(Type-locality)としてゐるところである。

かくて翌年(1776)二月十七日となつた、始めて官許を得て長崎附近の採集をした。従者頗る多く大變迷惑をしたが丘や山を心ゆく限り歩くことが出来た。この後江戸への出發まで一週間に一回或ひは二回づゝ規則的に採集を續けた。

三月四日(1776)チュンベリーは館長 FEITH 秘書 KOHLER と共に歐洲人はたゞ三人、けれども多くの日本人を同行として江戸に向つた。(和蘭人は舊正月十五日(二月二十二日)出島を出發するが常例なり。シーボルト)旅行中は主として乗物に輿がれ、通譯御番所衆がその側につきそつた。この日は長崎(*Nagasaki*)*より矢上(*Jagami*)に到りこゝに晝食をなしそれより諫早(*Isafaja*)に到着して一泊す。

三月五日諫早をたち大村(*Omura*)にて晝食し彼杵(*Sinongui*)に着きて宿す。

三月六日彼杵を出て嬉野(*Orissino*)を過ぐこゝに硫黄泉をおとづれ武雄(*Takivo*)

* 以下()内のイタリツクの地名は LANGLE'S, Voyages de C. P. THUNBERG au Japon par le cap de Bonne-Espérance, les Iles de la Sonde, etc. Paris (1796) より引用す。

にて晝食をとり午津 (*Otsinsou*) にて止る。

三月七日午津をはなれて嘉瀬川 (*Kassagarwa*) を渡り佐賀 (*Sanga*) に及び更に神崎 (*Kansaki*) 中原 (*Nakabara*) 轟木 (*Todoriki*) をへて田代 (*Taysero*) に到る。

三月八日田代を去り原田 (*Farda*) を通過山家 (*Djamajo*) に及び冷水峠 (*Fiamito*) を越えて内野 (*Oulsini*) をへて飯塚 (*Iska*) に着く。(シーボルトは二月二十日に冷水峠を通過せり。)

三月九日飯塚より直方 (*Rogata*) をすぎ木屋瀬 (*Koyanose*) にて晝食をなし黒崎 (*Korosoki*) を経て小倉 (*Kokoura*) に着く。

三月十一日午後まで小倉に滞在し庭園にてマツ、ツツジ、キク、アオキ、ナツテンなどを見た。

三月十一日夕方船にて下關海峡 (チンペリーは海峡になつてゐるのを知らず *Bai Shimonoseki* (下關灣) と記せり。シーボルトは海峡なる事を知りフアン・テル・カベルレン海峡と名づけた。) を過ぎ下關 (*Shimonoseki*) に宿る。

三月十二日下關より日本船に乗り込む。これより海路兵庫に向つたが途中暴風の爲め難航を續け特に上ノ關 (*Kaminoseki*) には三週間風待ちをした。追風を得て地家室 (*Djino-kamorou*) に向ひこゝに入港す。それより御手洗 (*Miterai*) をへて二十六日の難航の後四月八日の朝やうやく兵庫に着く。西宮 (*Isinomia*) にて食をとり尼ヶ崎 (*Amagasaki*) をへて神崎 (*Kansaki*) に向ひ船によつて大阪 (*Osakka*) なる宿舎に着く。(シーボルトは三月二日下關を發し室に向ひ三月七日同地に着くそれより陸路京都に向つた。)

四月九日朝の出發頗る早く守口 (*Morikuts*) 枚方 (*Firakata*) 淀 (*Iodo*) を過ぎ伏見 (*Fushimi*) にて晝食し京都 (*Miaco*) に到着す。これより十三日迄の四日間は京都に滞在した。されど附近の山々に採集せるが如きことはない様である。

四月十四日京都を出發蹴上 (*Keagui*) 石場 (*Isaba*) を通り瀬田 (*Tsetta*) を越えて草津 (*Kousats*) に泊る。

四月十五日草津を出て石部 (*Issibe*) を過ぎ水口 (*Minakouts*) に晝食し大野 (*Ono*) 土山 (*Fitchoma*) 猪ノ鼻 (*Inofara*) より鈴鹿峠を越えて坂下 (*Sakanosta*) をへて關 (*Seki*) に着く。この日は途上種々の病人を診察した。

四月十六日關を去り龜山 (*Kamirouiammi*) 庄野 (*Sono*) 四日市 (*Iokai's*) 富田 (*Tomida*) を経て桑名 (*Kvana*) に泊る。

四月十七日桑名より船に乗りて宮 (*Mia*) に到る。宮より名古屋 (*Nagoya*) に着きて晝食し笠寺 (*Kassadera*) 鳴海 (*Maroumi*) を過ぎて知立 (*Tchiriou*) に宿る。

四月十八日知立を離れ矢作 (*Iafagui*) を通過岡崎 (*Okosaki*) にて晝、藤川 (*Fousi-kawa*) 本宿 (*Motosikou*) 赤阪 (*Akasaki*) 御油 (*Goiou*) を通りて吉田 (*Ioshida*) に達す。

June, 1932.

193

四月十九日吉田を後にして飯村 (*Imouri*) 二川 (*Ftagava*) 白須賀 (*Siraska*) をへて新居 (*Array*) より船にて舞坂 (*Maisakki*) に到る。篠原 (*Sinovara*) 濱松 (*Tammamats*) を過ぎ天龍川 (*Tindingava*) を船にて渡り池田 (*Ikeda*) をへて見附 (*Mitsuke*) に及ぶ。

四月二十日見附を去り袋井 (*Foukouroy*) を過ぎ日坂 (*Nisaka*) 菊川 (*Kikougava*) 金谷 (*Kanaya*) を通り大井川 (*Oingava*) を渡り島田 (*Shimada*) につく。四月二十三日まで島田に憩ふ。

四月二十三日島田を立ち藤枝 (*Fousida*) 岡部 (*Okabe*) 宇津ノ谷 (*Outsnoia*) 丸子 (*Mariko*) をへて安倍川 (*Abikava*) を越えて静岡 (*Foutcho*) 栗原 (*Gouribara*) を過ぎ江尻 (*Ieseri*) に泊る。

四月二十四日江尻を出て由比 (*Ioui*) を経、蒲原 (*Kamara*) にて晝食をとり船で富士川 (*Fousikava*) を越し吉原 (*Iosivara*) 柏原 (*Kasivabara*) 一本松 (*Iponmats*) 原 (*Fara*) 沼津 (*Noumatso*) 黄瀬川 (*Kisigava*) を過ぎて三島 (*Misima*) に晩方おそく到着す。

四月二十五日は三島を出發し箱根に掛つた。チュンベリーはこの日可成りの採集を行ひ箱根 (*Fakone*) を原品地とする事頗る多い。(シーボルトは四月六日沼津に宿につきしは午後十時なり。) チュンベリーの旅行記に言葉をかれば「この日余は乗物にてよりも徒歩にて進むこと多かりき。我が乗物より屢々下り山の頂を蔽へる自生の樹木灌木に沿ひて歩けり。この日こそ我等の長崎出發以來最初の植物紀行なり。我が輿夫の荷を輕るくすれば通詞御番所衆の脚をば使用することとなれり、これ等の人達は交代にて常に我が側につきまとふが役目なり。役人は余の道路より離るゝをば許さざれども余は屢々程近くの岩のほとりに到りて這上りたり。我が忠實なる同伴者は余の如くアフリカの山野に攀登れるの經驗なければ苦しむこと甚し。余の飛び越えたる崖斷をば危き足にて下らんとするひまに余は開花し始めたる稀らしき植物を我が布片の中に集めたり。山の頂に到着すれば四百米程下りて箱根に達す、こゝにて余等は晝食し歸路に受け取るべき木工品の注文をなせり。山深き中に美はしき村をおとづれこゝで我々は淡水湖に澤山の魚類あるを見る、就中マスの存在には一驚せり、そは余等が食卓に上せられたり。この湖の中に小さき島あり。朝より通過せる途中は峻しき坂なれど畑はいづこにてもよく耕されたり。箱根の町は山の頂に位し栽培には全く不便なるに百五十軒もならびたり。

余等はこの心持よき處に心をば残しつゝ去れり。山を下りすがら余は路傍や其の程遠からぬところに生ぜる種々の植物の花、果實などを採集せり。」

湯本 (*Iamoto*) を過ぎて小田原 (*Odawara*) に着きて泊る。

四月二十六日小田原を後に朝早く酒匂河 (*Sakkawa*) を船にて渡り、平塚馬入川 (*Banningawa*) を越えて南湖 (*Nanko*) を過ぎ藤澤 (*Fousisawa*) をへて戸塚 (*Totsuka*) に泊る。

四月二十七日戸塚より保土ヶ谷 (*Odogaiia*) 神奈川 (*Kanagawa*) 鶴見 (*Souroumi*) 川崎 (*Kawasaki*) を通り六合川 (*Kokogawa*) を越え大森 (*Omouri*) をへて品川 (*Shinagawa*) に到りこゝにて休憩の後高輪 (*Takanawa*) を過ぎ日本橋 (*Nipponbas*) を渡りて江戸の宿舎についた。(シーボルト江戸到着は四月十日なりき。)

四月二十八日より五月十八日將軍に拜謁するまでの間は市内の外出を禁ぜられてゐたが天文學者二人と醫師五人は官許を得てチュンベリーと對談した。

チュンベリーは物理學植物學就中内科と外科につき教へた。この中に特にチュンベリーと親交を結んだのは桂川甫周 (*Katsuragawa-Fodjou*) と中川淳庵 (*Nagawa-Sounnan*) である。チュンベリーも「最も年若き桂川甫周は將軍の侍醫で頗る氣持よき人なり其の友中川淳庵は大名の侍醫にして和蘭語を語り博物學に通ぜり。兩人の我が側に常に侍れるをばうるさしと思ひし事もありしかど余はそれによつて屢々愉快に時を過し更には我が知識を啓發せり。兩人は余に藥品をもたらしさては鑛物、草木、花をたづさへ來れり、余はそれを乾燥して腊葉に作りたり。又二人は余にこれ等植物の日本名を教へ余は代りに和蘭名羅典名を傳へ其の効用並びに歐洲人の用法をも教へたり。」

かくの如くこの二人の日本の學者はチュンベリーの江戸滞在中殆んど毎日訪門し和蘭醫術を熱心に研究しチュンベリーも亦喜んで二人を指導した。歸國後もこの時の親交がつゞいてこの二人や通詞などとは交通がありチュンベリーからは手紙や歐洲の物品を送りとゞけ日本の方からはウブサラ大學の植物園に植ゑるべき貴重な種子や其の他博物學の材料を送つた。

五月二十五日江戸を出發歸路につく。路は往路に同じく川崎 (*Kawasaki*) にて晝食し戸塚 (*Totsuka*) に宿る。

五月二十六日戸塚を去りて小田原に泊る。

五月二十七日再び箱根を越ゆ。箱根の町にて晝食し往路に注文せし品を受け取りてそれより三島に到りて泊る。

五月二十八日三島を後に吉原を過ぎ蒲原 (*Kambara* 往路には *Kamara* とあり。) にて泊る。

五月二十九日蒲原より静岡 (*Soutsio* 往路には *Foutcho* とあり。)。

五月三十日静岡より島田に到る。

June, 1932.

195

五月三十一日島田を立ちて日坂 (*Nissaka* 往路には *Nisaka* とあり) に止まり六月三日まで旅客輻輳の爲めこゝに止まつた。

六月四日日坂より掛川 (*Kakigawa*) に宿る。

六月五日掛川を立ち往路と同じ道に見附 (*Mitsuke* 往路には *Mitsuke* とあり) 新居 (*Array*), 岡崎 (*Okasaki* 往路には *Okosaki* とあり) 石薬師 (*Isiakousi*) 水口 (*Minakouts*) 石部 (*Isibe* 往路には *Issibe* とあり) にて晝食をとり濱松 (*Fammamats* 往路には *Tammamats* とあり) 吉田 (*Iosida* 往路には *Ioshida* とあり) 知立 (*Tchiriou*) 桑名 (*Kvanau*) 關 (*Seki*) 草津 (*Kousats*) の宿々に泊り重ねて京都に着いた。

六月十二日京都にて天皇に拜謁す。この午後侍醫なる人チュンベリーを訪問し数々の植物の名稱とその効用を聞き且つは種々の病氣の療法をたづねた。然し其の植物は大部分つんだばかりの植物であつた。この時既にチュンベリーは日本字にて植物の名稱を示す事が出来たのであつた。拜謁の歸りは可成り自由に市街を歩きまはつた。(シーボルトは五月十八日江戸を出) (發し六月一日京都に到着せり)

六月十三日京都を出發伏見にて晝食をとり大阪へと小船によつて淀川を下る、夜船である。

六月十四日朝大阪に着く、こゝにて二日間を過した。大阪はチュンベリーには特に愉快に感ぜられ芝居を見物したり乗物にて街を見まはつた。「余は特に注意して庭園にこつて配置された植物や小鳥の蒐集とか小さな棒形の銅を作る鋳鑪場を觀察せり。余は小鳥を賣る街を散歩す、こゝには實に澤山の小鳥集まれり、これ等は日本の諸々方々より集められたるものにして賣るために陳べられたり。尙又この街には極めて心を用ひた植物園あり。果樹園はなけれどこの國の中に生ずるありとあらゆる樹木灌木を栽培せり。植木屋は賣つてくれるので其の時の使ひ得る限りの金をば鉢植ゑの草木灌木にかへたり。即ちカエデ (特に日本にて最も美しき品種なるが) この海外輸出は頗る困難なるものなりき、ヤシの一種 (*Cycas revoluta* ソテツ) これにはこの植物の髓が滋養に富むが故に日本人はひどく高價をとなへたり。彼等日本人は同じ樹木の支那に生ずるを知らず。余はこれ等の植物を一つの大きな箱に移し植ゑ充分によく荷作りせしめたり。この箱は長崎に向けて發送され次いでバタバヤに向ひ更にアムステルダム植物園に運搬されるなり。」

六月十五日大阪を去つて兵庫 (*Piogo*) に向ひ下關へと乗船した。歸路は海上幸ひにも平穩にしていくばくならずして小倉に到着、往路を逆に六月二十五日長崎に歸着した。

六月二十五日より再び居留地出島の生活となる。

七月三十一日和蘭商事會社の船 ZEEDUYN 入港八月二日 STAVENISSE も入港す。
十一月二十三日 チュンベリーは長崎出島を去つて高銚島に投錨せる旗艦上の人となり十二月三日日本を離れてジャバに向つた。

かくて其の後重なる旅行を終へ歐洲に歸つて後ウプサラ大學教授となり植物學に多大の功績を残した。

チュンベリーの日本植物に関する文獻を擧ぐれば

Weigelia japonica (Act. Reg. Acad. Scient. Holmens (1780), 2 qu. p. 137, tab.).

Kaempferus illustratus (Upsaliensis societas litt. (1783), Vol. 4).

Flora Japonica sistens plantas insularum Japonicarum. Lipsiae, 1784, in -8°, 39 tab.

Icones plantarum japonicarum quas in insulis japonicis annis 1775 et 1776 collegit et descripsit C. P. Thunberg. Upsaliae, 1794, 50 tab.

Voyages de C. P. Thunberg au Japon par le cap de Bonne-Espérance, les Iles de la Sonde, etc., traduits, rédigés et augmentés, etc., par Langlès et revus quant à la partie d'histoire naturelle par J. B. Lamarck. Paris, an IV (1796), in -4°, vol., 20 pl.

Botanical observation on the *Flora Japonica* (Transactions of the Linnean Society, vol. 2, p. 326—352). London, 1. Oct. 1793.

Betula japonica (Upsal. Soc. litt. vol. 4 (1798), p. 45, tab. 4).

Fumariae quatuor novae species e regno Japonico descriptae et delineatae (Acad. Petropol., 21 janv. 1799, cum tab. 4).

Carices Japonicae 7 (Parisiens. Instit. gallici, 1810, cum fig.).

Caenopteris (Nova Act. Petrop. IX, p. 157, tab. 7 C).

Examen Liliorum Japonicorum (Mém. Acad. Imp. des Sciences de Saint-Petersbourg, vol. III (1811), p. 200—208, pl. 3, 4 et 5).

Descriptio 15 Japonicae et 341. Capenses incognitae plantae (Parisiens. hist. Natur. Societ).

Plantae Japonicae illustratae (Upsal. Societas litt. vol. 7 (1815), p. 140).

要するに1775—1776年までの約一ケ年の採集は自由に出あるく事さへ出来なかつたのであり本州では東海道すちの春より初夏の植物しか見られず九州でも長崎附近のものしか手に入らなかつた。又當時日本人で立派な腊葉を作る人がなく彼等から標品も得られなかつた。たかだか種子を少しもらつた位である。チュンベリーの研究した植物の原品地はかく限られて来る。かゝる状態にもかゝらず約一千種の日本植物を歐洲の學界に發表した。又彼の苦心して採集せる標品は其の後 Linneus fil. を始め多くの學者によつて研究され實に日本植物分類學の礎となつた。日本に興味

June, 1932.

197

をいただき自ら日本に來り植物分類學の初期に日本植物を紹介し原産地を日本に定めたチュンベリーに謹んで感謝を表したい。

天笠マメヅタの麋角狀變種に就て

On the Stag-horned variety of *Drymoglossum piloselloides* PRESL.

照 屋 全 昌

by Z. TERUYA

天笠マメヅタは、印度の各地方（主として南部）ビルマ、錫倫、馬來半島、瓜哇比律賓、交趾支那及びポリネシア等に互りて廣く分布する最も普通なるマメヅタの一種である。余は昭和二年十一月ジヨホール國コタテング州ナムヘンに於て、同種の實葉が著しく普通品と異り、叉狀乃至數枝に且つ不規則に分岐するものを採集した。當時本品は同一樹上に發生せる一株丈けに、何等かの事情の下に變形せるものと考へ居たるも、更に其後新嘉坡郊外の某舍宅地内に於ける灌木上に發生せる同種の實葉が、同じく前記の如き不規則なる叉狀に分岐せるものを發見し、該變種が唯單に一時的、一地方的のもので無く、馬來地方の各地に散在することを知り、且つ未だ記載せられて居ない新變種なることが明らかになつたから、茲に報告することにした。

Drymoglossum piloselloides PRESL., NAKAI, in Tokyo Bot. Mag. XL. p. 300 (1926); BEDDOME. Handb. Fer. Brit. Ind. Ceyl. & Mal. Pen. p. 411, Fig. 244. (1892).

var. *platycerioides* TERUYA nov. var.

根莖及全態は基本品と殆んど變らないが、莖の先端に位する裸葉の一部は著しく長大となり、匙狀又は不規則なる匙狀となり（第九及十圖）、その一部のものには先端が分岐せんとする傾向を有して居る（同圖 c-d）、之等の葉は普通の葉よりも著しく大きく、長さ 4.2—5.3 cm. 中央幅 1.5—1.6 cm. に達す。

實葉は普通形のものをも生ずれども（第三圖 a-b）、その大部分は第一圖及第八圖に示すが如く、麋角狀に分岐して奇觀を呈す。又普通線形を呈する實葉の内にも第二圖 e, f, 第三圖 g 及び第四及五圖に於けるが如く將さに分岐せんとする傾向を有す。

此等の内普通型の實葉は、長さ 5—11.5 cm. 巾 4.5—9 mm. なるを普通とすれど